

第13話：？インディオ少年の謎

タロとディオは、ティピで一夜を過ごし、翌日早朝に雄鶏ピーターの鳴き声で眼が覚めました。ティピ入り口の布が開けられ、そこに、インディオ少年イシク・クルがいて、「朝の草原は気持ちいいよ。一緒に行こうよ。」とタロ達を誘いました。三人は、朝のさわやかな空気を胸一杯吸いました。野牛がチラホラと、草原にたたずみ、朝食の真っ最中です。ディオは草原をとことこ走り廻り、野牛に朝の挨拶をしています。タロと少年は、それぞれ腕を枕に空を眺めています。ユリノキの木陰から涼しい風が通り抜けていきます。二人の頭上を、雷鳥の親子が走り抜け、それを追いかけていた狼は、遠くから二人を見つけて、諦めて去って行きました。静かな朝です。

どれほど時間がたったのでしょうか。雄鶏ピーターの慌てきった鳴き声で、二人は眼を覚ましました。彼は何かを訴えるかのように、首を西に捻じり、羽ばたきました。西から小さな囁きが聞えるような気もしましたが、タロはあまり気にならず、タロ達はまた眠りにつきました。

ところがです。遠くからの沢のせせらぎが、流れとなり、さざ波とない、急流となり、何時しか濁流に、ついには滝の爆音と鳴り響きました。「一体どうしたんだろう？」タロは傍に手を伸ばし、戻っていたディオの手を確かめ、少年とともに飛び起き、草原を見渡しました。辺り一面には、土ぼこりが立ち込め、前が見えない程です。先ほどの爆音は、野牛達が西から爆走してきた音でした。

暫く眼を凝らすと、そこには、数え切れない数の野牛が後から後からやっていて、村外れにある牧草地に集結し、そこで落ち着きを取り戻し、牧草を食べ始めました。タロ達と同行してきた海馬も、野牛の群れに加わり一緒に牧草を食べ始めました。少年イシク・クルは、群れのなかに、毛足の白い野牛を見つけ、それに近づきました。野牛は、少年と眼を合わせると、彼の傍らに駆け寄って頭を摺り寄せて、甘えるように鳴きました。少年は白い野牛の話に耳を傾けました。少年は、野牛の首根っこに腕を絡ませながら、傍に立ってびっくりしているタロ達に近づき、話を始めました。

「この白い野牛はこう言っている。彼ら野牛達は、西の方からやってきたのさ。西の方、そう、僕がここに来る前にいたトテム族一統の居住地さ。四つ葉のクローバーが生い茂る夢のような土地だった。でも彼の話によると、昨年の暑い夏から秋に掛けて、ロッキーバッタという名のバッタの大群が発生したそうさ。バッタは「飛蝗」と書くらしいが、その大群が牧草はもちろん、小麦、牧草、木の葉など、ありとあらゆるものを食べに食べ尽くして、冬の到来とともに消えたらしい。そのせいで、トテム族が放牧で面倒を見ていた野牛の食べ物が減ってしまった。冬場に向かうにあたって、トテムの族長は、野牛の餌の手当もおぼつかないままさ。多くの野牛が餌不足のため命を失った。このままではいられないと、彼らは西から東へと集団脱走をしてきたそうさ。」

タロは尋ねました。「どうして東方に来たのかな？」

少年は答えました。「トテム族の地、そこは僕がここに来る前にいた場所さ。よそ者だった僕がお世話になった場所、そして僕が追い出された場所でもある。野牛達は、僕がここにいることを知っていたんだ。」

タロは首のひねり、重ねて尋ねました。「でも、大事にされていたのに、なぜ追い出されたのかな？」

少年は急に無口になりました。しばしの沈黙の後、少年は重い口を開きました。

「僕が部族の掟を破ったからさ。僕はそこで面倒を見てもらった。牧畜も教えてもらい、お手伝いもし、野牛も手懐けていたさ。でも、掟を二つ破ったんだ。トテム族には格言があるよ。「物事を決める時には、七世代後の子孫への影響まで考えた上で決めるべし」ということさ。トテム族は、数字の4、7に神秘の力を感じているのさ。四つ葉のクローバーといい、七世代といい。この世界も、空、太陽、月、星の四つでできているとし、その通りさ。また、彼らは仲間以外には自分の本名を明かさないのさ。トテム族という名前自体が、彼らが住む村の入口にあるトーテムポールという柱に由来して外部の者が名付けた。本当の部族名は秘密なんだ。人も同じで、世話になった族長はボス、僕はチビと呼ばれた。なぜ本名を隠すか？本名を知れると、敵が呪いをかけられるからだ。とにかく、トテム族にとって、名前は大変重要なんだ。」

「思慮深いトテム族の掟のうち、僕は二つの掟を破った。

1. 生まれた子牛に名前を付けてはならぬ。
2. 病気とわかった牛は廃畜場に捨てなければならぬ。」

少年は、白い牛の首に手を掛けながら続けました。

「僕は、こいつが生まれたとき、とてもとても嬉しくて、掟があることはわかっていたけど、内緒でこいつ名前をつけたんだ。『パロ』っていう名前さ。そして、周りに人がいないときに、その名前で呼んでいた。パロもそれが自分の名前だとわかっていたんだ。な、パロ！」

白い野牛は、首を上下に大きく振りしました。

「パロって、タロと似ていて良い名前だね！」とタロが自慢げに言いました。少年は続けます。

「パロは大きくなって毛が生え変わり、白い毛となった。世話になっていたトテム族長は、白は不健康な証拠だと思い込んでいたんだ。ちょうどそのとき、パロは風邪を引いて熱を出し、体が燃えるように熱く火照ったことがあったのさ。族長は、シャーマンを呼んだ。シャーマンは、パロが疫病に掛かっているとして、廃畜場に捨てるように命じ、族長は実行した。」

「廃畜場とは、姥捨て山のようなところさ。年取って乳が出なくなった母牛、崖から落ちた牛、病気になった牛、など、トテム族にとって不用になった牛の捨て場なのさ。僕は雌牛の乳を搾り、廃畜場に捨てられたパロのもとへ何回も持っていき、飲ませたんだ。そこに年老いた老牛がいて、彼にも乳を飲ませた。彼はお礼に、トテム族の歴史、なかでも歴代トテム族族長の名前を教えてくれた。ホワイトレッグ、ホワイトテール、ホワイトヘッドなど皆、頭に白という名前がついているんだ。

そしたら暫くしてパロは元気を取り戻して、仲間が呼ぶ声に答えて、自力で群れに戻ったんだ。

もちろん、白い毛に泥を塗してね。」

「でも、なぜ子牛に名前を付けるって、いけないの？」
少年は答えます。

「名前を付けて可愛がって、一緒に暮らした牛が大きくなったからって、命を奪って食べることができるかい？ そんなことはできない。でも、食べないと生きられない。それがわかっているから、名前を付けない掟なのさ。」

「白い子牛はそんなに不健康なの？」

「不健康に見えるだけさ。」

「だって、トテム族族長の名前には、皆、ホワイトって
ついているじゃない？白って決していけない色ではない
から、皆がその名前をつけたんじゃないの？」

「そうだね。でも、体の一部分ならいいけれど、全身が
白色だと、神々しくて、この世のものと思えないかもね。
だから、不健康に見えたのさ。」

「じゃ、なぜ掟破りがわかったの？」

少年は答えます。「猛烈な雨が降ったんだ。パロの泥が
落ちて白い毛並みに戻ったからさ。パロが、廃畜場から
出たことがわかったのさ。」

「パロに名前を付けたことは？」

「そのことはバレなかった。パロ以外誰も知らなかった。
誰が知っていなくても、掟を破ったことに変わりはないよ。
でも、パロにもう一度会うことができるなんて。
こんなに嬉しいことはないよ。」

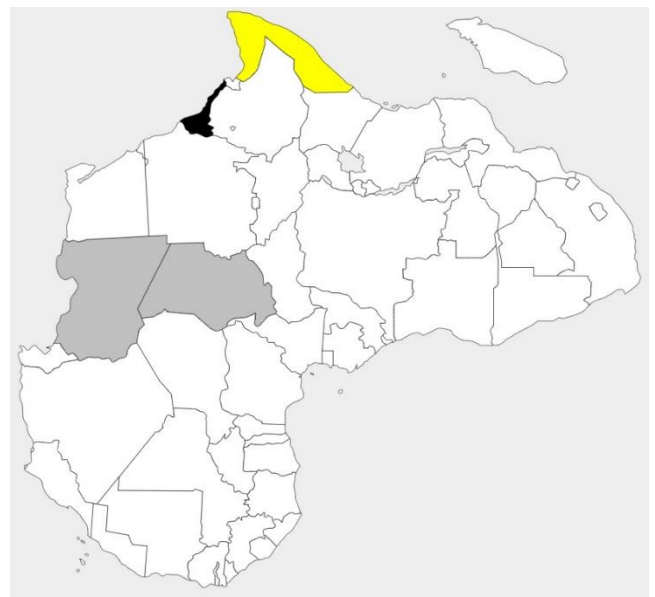
少年は、また牛の首に腕を回して、牛を抱き締めました。
ディオも背伸びして、牛の喉元を撫でました。

そして、少年はタロの方に向き直って話を続けました。
「僕ね。掟破りでトテム族の部落から追放されたんだ。
行く宛もなく流浪の旅を続けたけど、食べ物がなくなり、
行き倒れになったんだ。偶々、その場にポタワトミ族の
酋長コモが通り掛かった。聞くところでは、白い鳥の後
を追いかけて来たとのこと。コモは、ぐったりしている
僕を野牛の背に乗せて、自分の部落に連れ帰ってくれた。
皆の看病で、僕は元気を取り戻せたんだ。」

タロは尋ねました。「白い鳥って何？」少年は答えます。

「僕の命が危ないことを伝えたかったんだらうね。」

実は、白い牛、白い鳥の秘密は、まだ他にもあります。
いつかお話する機会があると思います。



早いものでもう立春。なにか良いことが始まる予感です。
タロは気になって、ズボンのポケットの小さなノートを開くと、十一頁目に文字が書いてあります。

「易経：上卦＝雷：下卦＝山：雷山小過」

「飛鳥空をゆく、高きを過ぎれば羽を損う：低姿勢」
掟を破る小さな過ち、でも新たな一歩。

「東風が厚い氷を解かし始める」立春の始まりです。

一つ、秘密を教えます。北米の「亜米利加」には、族長
コモの横顔が隠れています。地図を90度、右に傾けると、
左を向いた精悍な横顔があります。

